

博士学位請求論文審査報告

2021年7月14日

申請者：徳安 慧一（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程 SD141016）

論文題目：男女別学校をめぐる経験とホモソーシャルリティ
—北関東公立男女別学高校同窓会役員のライフヒストリーから—

論文審査委員

小林 多寿子

佐藤 文香

木村 元

1. 本論文の概要

本論文は、共学制が一般化した現代日本においてもなお、なぜ男女別学制が存続しているのかという問題意識のもとに、別学に対する価値観と別学経験が個人の人生においてもつ意味や価値に着目し、公立別学高校同窓会役員たちへのインタビュー調査を中心とする質的調査法によって男女別学出身者が有する同性同士の絆というホモソーシャルリティの析出に取り組んだものである。

著者は、男女共学別学研究の系譜を批判的に概観したうえで、性別二元論的な学校教育制度としての男女別学を研究する視座としてホモソーシャルリティ論を検討し、ホモソーシャルな関係が駆動するメカニズムとジェンダー化された主体への影響を考える理論的視座を考察した。ついで、日本の学校教育制度における男女別学の動向と共学化をめぐる言説を検討し、ジェンダー平等とは異なる原理の混在した共学化推進によりジェンダー平等の追求につながらない現状の問題点をあきらかにした。

本論文は、これらの系譜研究と理論的視座の検討の上に立って、マスメディアや学校関連出版物等の資料分析および北関東の男女別学高校同窓会調査をおこない、別学校同窓会の実態、共学化反対に対してはたした役割や世代間の相違を考察したものである。さらに、別学校出身者のライフヒストリーにおける別学経験への意味づけ、価値づけとホモソーシャルな紐帯の関係を女子高・男子高双方の出身者において論じ、男女別学校のホモソーシャルな絆同士の関係性を論じている。

これらの検討の結果、著者は、男子高と女子高とで共学化反対をめぐるホモソーシャルな絆が共学推進派に対して利害一致をもたらしているとして、ホモソーシャルな関係の重層化と共犯関係をみいだし、さらにこの性別二元論的な学校教育制度の維持のための共犯関

係は、個人レベル、組織集団レベル、制度レベルを通貫していることもあきらかにした。

2. 本論文の成果と問題点

本論文の成果としてつぎの三つの点をあげることができる。

第一に、「ジェンダーと教育」研究に「人生全体の視野」をとり入れたことである。男女別学・共学研究が学校教育の範疇に限定されていた状況に対して、人生全体を視野に置いて「ジェンダーと教育」の問題として主題化しようとした試みはオリジナリティのある視点として評価される。従来、学校教育制度である男女別学校問題は、教育の機会均等や卒業後の就労など教育結果の平等という制度的課題が主流であった。本論文は、学校教育段階に限らず人生全体というより広い射程からジェンダー問題全般のなかに教育を位置づけて問うことによって、ジェンダーの差異の政治がいかに関動するかをみるというより大きな視点を「ジェンダーと教育」研究にもたらすことを可能としている。

このような「人生全体の視野」を具体的な研究方法としてとり入れるにあたって、著者は、男女別学校出身の50代、60代を中心とする同窓会役員に対するライフヒストリー・インタビューという方法をとった。卒業後30年、40年という時間的経緯のなかで別学校に由来する経験の語りとライフコースをとらえ、たんねんに描きだすことに成功したことが本論文の魅力の一つとなっている。

第二に、男女別学研究の方法論的意義をあげることができる。本論文では、メディアや学校関係出版物等の言説分析と関係者へのインタビュー調査という二種類の調査をおこなっている。とくに男女別学経験への主観的な意味づけを問うインタビュー調査では女子高と男子高を同様に調査対象としており、これは、本論が依拠する理論的視角をふまえた調査実践であり、男子高・女子高両方を同時にとりあげたことに意義がある。

また実際の調査プロセスにおいては、理論的整合性のあるリサーチデザインのもとで調査手順を踏んで両校の調査対象にたどりついており、倫理的配慮も心掛けた調査をおこなっている。1年8か月かけて計25名の別学校同窓会役員および関係者へのていねいなインタビューを実施し、解釈的客観主義と対話的構築主義の折衷型による分析アプローチを採用し、個別のライフヒストリーを豊かに析出しつつ、女子高・男子高の女同士・男同士の絆を描きだしている。理論的視角をふまえた分析アプローチによる男子高・女子高の比較分析は、本論文が依拠する理論的視角を具現化する重要な調査実践である。

第三に、男女別学経験をホモソーシャルリティ論にもとづいて検討したことである。男女共学・別学研究にホモソーシャルリティ概念を適用するという新たな理論的視座を提供したことを成果として評価できる。従来、性別二元論的にジェンダー化された学校教育制度である男女別学校を研究するに際して、同性同士の絆というホモソーシャルな関係性の考察および男女双方のホモソーシャルな関係に通底するダイナミズムについてはかならずしも十分に検討されてこなかった。ホモソーシャルな関係をみることは、とくに性別カテゴリーにもとづいた認識による共属性と異質な存在の排除のメカニズムを問うことになり、この点は男女別学研究にとって重要な貢献である。男性学・男性性研究の成果を越えて、女性のホモソーシャルリティ研究も同時におこなうことが男女別学研究において理論的視座を有効に展

開することにつながっている。実際の調査対象となった二つの別学校調査では、別学維持のための活動が結果としてもたらすホモソーシャルな関係における共犯関係もあきらかにされており、これは本論文の新たな発見的成果となっている。

以上の他にも本論文の成果は少なくないが、残された課題がないわけではない。以下に二つの点をあげたい。

第一は、学校経験の解釈の深度の問題である。男女別学問題に対して学校教育期間にとどまらず人生全体を視野に入れて検討したがゆえに卒業後の職業キャリアやライフコースに重点がおかれ、学校経験そのもの、そして戦前期からの旧制中学校・高等女学校の歴史をもつ調査対象校の学校文化としての「校風」への視点が欠けていたことはいなめない。校風は、制度文化と生徒文化の対立を埋めるものとして存在し、学校の統一性を象徴し、関係性を規定する独特な役割を担っている。別学経験者たちの学校における経験、校風という学校文化のなかでいかに生きたのかについての厚い記述によって、別学経験をより生きられた経験として示すことができたのではないかと惜しまれる。

第二は、理論的課題である。ホモソーシャルリティ論の理論的レビューにより、セジウィックの「性愛の三角形」の源泉であるジラールに遡って概念図式を検討しホモソーシャルリティ論の拡張を図った点は、挑戦的ではあったものの、実際の調査で得られた北関東の二つの公立男女別学高校におけるホモソーシャルな関係の考察における概念図式の応用において、十分に説得的な議論になっているとはいいたい。また、ホモソーシャルリティ論を軸にした分析により「ジェンダーと教育」研究の新展開を図った点には新規性があるものの、ホモソーシャルな関係における非性的な側面に焦点をおいたためにセクシュアリティの問題を十分に取り入れることができなかった。ホモソーシャルリティ論にとってセクシュアリティの問題は大きな課題であり、さらに現代の学校教育においてセクシャル・マイノリティと別学制度問題も重要テーマになっていることから、理論的・実証的にこれをいかに補強していくかは今後の課題であろう。

これらの点は、本論文でもっとも評価される別学校卒業生の諸個人の人生全体の視野のもとに豊かな経験の語りをもって「ジェンダーと教育」研究を深めるというオリジナルな試みを活かすためにもなお一層の検討が求められるところである。ただ、これらの点は、本論文の学位論文としての水準を損なうものではなく、筆者自身も重々自覚しており、今後のさらなる研究において克服されていくことが十分に期待できるものである。

3 最終試験の結果の要旨

2021年6月2日、学位請求論文提出者・徳安慧一氏の論文についての最終試験をおこなった。本試験において、審査委員が、提出論文「男女別学校をめぐる経験とホモソーシャルティ―北関東公立男女別学高校同窓会役員のライフヒストリーから―」に関する疑問点について逐一説明を求めたのに対し、氏はいずれも十分な説明を与えた。よって、審査委員一同は、徳安慧一氏が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（社会学）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有するものと認定した。